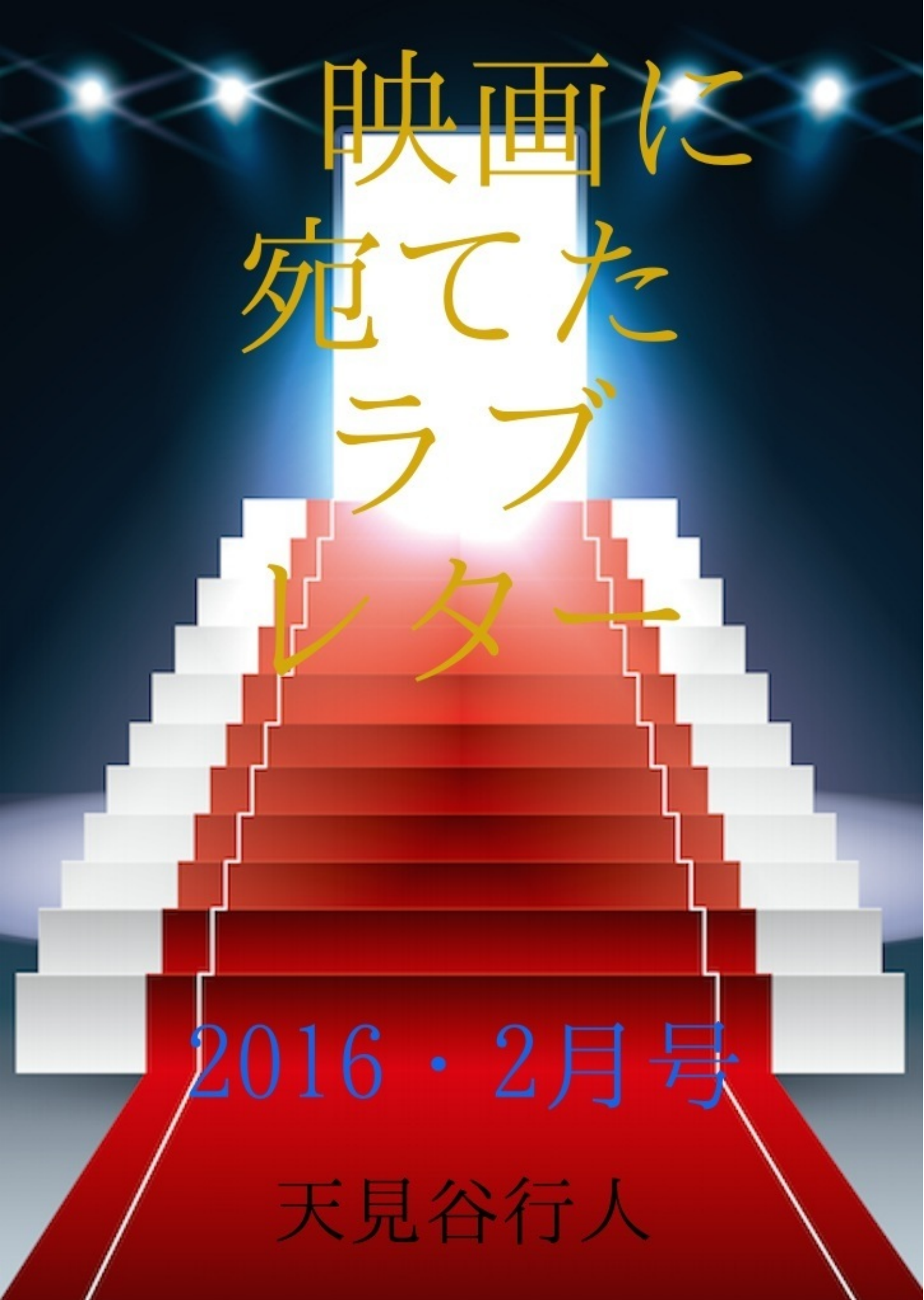




映画に 宛てた ラブ レター

2016・2月号

天見谷行人

ご挨拶

ご挨拶

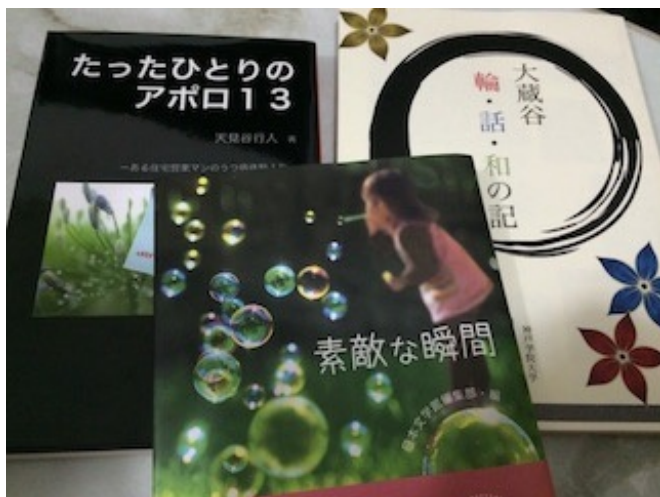
みなさま、こんにちは、天見谷行人でございます。

いつも映画レビュー集をお読みいただき、誠にありがとうございます。

「映画に宛てたラブレター2月号」をお届けいたします。

今月号は、洋画4作品のレビューのみとなりました。邦画のご紹介ができなかったのは残念です。これは私自身の体調不良（うつ病の悪化）もありまして、劇場に足を運ぶことが困難だったためです。なお、現在は外にも出歩けるようになりまして、ずいぶん元気になりました。

その勢いに乗じて、と申しましょうか、調子に乗って、今度「自分史をつくろう」という無料講座を開設する予定でございます。会場もすでに予約してしまいました。4月29日に兵庫県明石市で開催いたします。



まあ、どんな催しになるのか？ 人は集まるのか？ いろいろと不細工なことを「やらかす」とは思いますが、その悪戦苦闘ぶりを、ブログで公開して行く予定でございます。

その模様は、

天見谷行人[オフィシャルブログ「やっぱり紙の本が好き」](#)をご覧くださいませ。

[天見谷行人FaceBook](#) もよろしくお願いいたします。

リアルなアマミヤユキトが、どんな不細工なダメ人間か、講座に参加して笑ってやろう、というご奇特な方がいらっしゃいましたら、メールでお申し込みを受け付けております。下記のアドレスまでどうぞ。

yukitoamamiya@gmail.com

詳しい資料をメールでご返送させていただきます。よろしくお願いいたします。

天見谷行人

独裁者と小さな孫

独裁者と小さな孫

2016年1月4日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

可愛い孫へ注目しちゃうよね

この作品、紛れもなく悲劇のはずなんですが、どこかユーモラスでもあるんですね。

このあたり、監督の目線、登場人物を見つめる目に、温かみや人情味を感じるんですね。それで随分救われた気分がする作品です。

また、この作品、どこかですで見たとような「デジャブ」を感じるのですが.....

独裁者、絶対的権力者がその地位を奪われ、逃避行を続けるお話。

そうです。

古くは、あのシェイクスピアの「リア王」

そして映画では「リア王」をモチーフとした、[黒澤明監督作品「乱」](#)がありました。

「乱」では城主とその家来、いや”人間未満”の存在である「道化」がお供をしましたね。

本作ではその道化の役割を、独裁者自身の幼い「孫」が担っている形なのです。

国内でクーデターが起こり、大統領夫人など、家族は飛行機で脱出します。

しかし、大統領はまだ事態が収束できると信じて自国に残ります。そのとき、偶然、孫が幼なじみの「マリアがいっしょじゃなきゃ、イヤだ〜！！」と言って飛行機に乗り遅れてしまうのです。止むを得ず大統領は、孫と一緒に専用リムジンで宮殿に帰ろうとするのですが。

すでにクーデター勢力は、すぐ身近に迫っていました。身の危険を感じた大統領は、宮殿を捨て、専用リムジンを捨て、大統領の盛装も捨て、貧しい旅芸人に変装し、ギターを持ち、孫と二人で危険な逃避行を始めることになるのです.....。



1999年「ライフ・イズ・ビューティフル」
2001年「蝶の舌」
そして――
2015年「独裁者と小さな孫」
強烈なラストに胸引き裂かれる
新たな感動作が誕生した

『カンダハール』でカンヌを激震させた巨匠の最新作 老独裁者は幼い孫と逃亡の旅に出る 絶望と希望。待ち受ける運命とは――

国内は体制派と反体制派が内乱を起こしている。国中が大混乱。ここで難民が発生します。

今、ヨーロッパでは、増え続ける難民が大変な問題となっていますね。この作品がヨーロッパでどのようなリアリティを持って受け止められたか、気になるところです。

さて、その難民の群れに紛れ込む大統領と孫。

幼い孫は無邪気に尋ねます。

「ねえ、どこへ行くの、大統領？」

「だまれ！！ 二度と大統領というな！」

「どうして大統領って言っちゃダメなの、大統領？」

「見つかったら殺されるんだ！！」

難民たちと共に、時には歩き、時にはトラックに乗せてもらい、あてもなく移動を続ける大統領と孫。難民の中には

「アイツ（大統領）に兄弟を殺されたんだ」と問わず語りに話す者もいます。

数多くの政治犯を処刑せよ、と命じたのは紛れもなく大統領自身でした。

ただいまは逃げるしかない。大統領はかつて一夜を共にした娼婦の元へ逃げ込みます。

そこで語られる、軍人たちの横暴。

「あいつら、お金を払ってくれないのよ、私の身体をもてあそんでくせに！！」

自分が政治を司ってきた、その国の庶民の生活、大統領はその現実を思い知らされるのです。

本作では、ときおり、孫の回想シーンが挟まれます。贅を尽くした豪華な宮殿、部屋の一室。お抱え教師付きで、大好きな幼馴染マリアとダンスのレッスンをする、未来の大統領になるはずだった孫の姿。

このあどけない微笑みに、この作品は救われているような気がします。

大統領の椅子から転げ落ち、旅芸人に身をやつし、今や懸賞金のかかった「犯罪者」「逃亡者」となった転落の人生。



本作で監督はどこに視点を定めようとしているのか？

それがちょっと気になりました。

というのも、クーデターが起きた国内の事情は描かれますが、海外へ逃れた、大統領の家族の目線によって、この独裁国家の全体像、また海外メディアの反応というの描けたはずですが、しかし、あえて監督はそれをしておりません。

あくまでも、監督が注視しているのは大統領という仮の名の「おじいちゃん」と「幼い孫」が逃げる、というお話であり、その様子をドキュメンタリータッチで描いて行きます。

本作で、やや食い足りなさを感じるところは、大統領の過去の「愚行」「蛮行」がほとんど描かれていない、ところにあるとおもいます。

そのため、間接的にどんなひどい圧政があったのかを「難民」の口から語らせて、観客に想像させる、という手法を取っております。

そのためにやや説得力不足を感じますし、悲劇の味わい、なにより庶民の切迫感、というものが「つくりもの」であるという雰囲気が拭えませんでした。

かつて、黒澤明監督の「乱」では、ピーターさんが演じた「道化」が極めて重要な役割を担っていました。これは元ネタのシェークスピアのリア王と同じですね。

「乱」での城主、お屋形様への辛辣な批判も平気で口にしますし、王様の心象風景を道化がうまく導き出し、観客に提示させるよう、実に巧みに描かれていますね。

本作においても、かわいい「孫」が、大統領の心の内を導き出してくれるのか？とおもっていると、むしろ「孫」の可愛さの方が演出上、勝ってしまい、その孫の「幼さ」と「可愛さ」に観客は関心を寄せてしまうのです。

その分、救いはありますが、作品に深みを与えるまでには至っていない、というジレンマが生じます。本作を鑑賞後、なんとなくサラリとした印象を持ってしまったのは、そういうところに原因がありそうです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 モフセン・マフマルバフ

主演 ミシャ・ゴミアシュビリ、ダチ・オルウェラシュビリ

製作 2014年 ジョージア、フランス、イギリス、ドイツ合作

上映時間 119分

[「独裁者と小さな孫」予告編映像](#)

ブリッジ・オブ・スパイ

2016年1月22日鑑賞

うごめく国家、うごめく人間

先日地政学の入門書を読んだ。例えば、自分が人工衛星にでもなったかのように地球を眺めてみる。

大陸や、いくつもの島々は動かない（実際には年間数センチ動くそうである）

しかし、その地面にうごめく、人、モノ、カネ、そして国家の勢力というやつは、絶えずアメーバや、粘菌の動きのように、グロテスクにうごめいている。

地政学というのは、その動かない土地と、これら国家と称する人間の集合体の「うごめき」の関係を探るものである。

地政学は、その名の通り、地理と政治に着目するが、他にも決定的に重要な要素がある。

軍事力という名の「暴力装置」および「テクノロジー」である。技術の発達是我々の生活を便利で豊かにしてくれる。

しかし、今や一般家庭で使われる民生品のテクノロジーの多くが「軍事」にも使われる。ふたつは二人三脚、仲良しなのだ。

特に原子テクノロジーは、原子力発電として各家庭に電気を送るいっぽう、究極の兵器「核兵器」を生み出してしまった。

本作は、「核兵器」を巡って米ソ両大国が緊張し対立していた1950年代のお話。

一人のアメリカ人弁護士が、共産主義国家相手に捕虜の交換を成し遂げた実話がベースとなっている。

トム・ハンクス演じる主人公、ジェームズ・ドノバンは、地味な男だ。しかし弁護士としての腕はいい、彼に一件の案件が持ち込まれる。刑事裁判だ。

アメリカ当局が捕まえたソ連のスパイ容疑者を弁護しろというのだ。

ドノバンは躊躇する。

「私の専門をご存知でしょう、保険分野ですよ」

「しかし、君はナチスドイツの戦争犯罪を裁いた、ニュルンベルグ裁判にも参加した経験を持ってるだろ」

なにやら、この裁判、いろんな政治の思惑が動いているらしい。止むを得ずドノバンは弁護を引き受けるハメになる。



ところが後に、アメリカの偵察機がソ連に撃墜されるという事件が起こる。パイロットは捕虜になった。さらには西ドイツにいたアメリカ人学生が、東ドイツ当局に拘束されてしまう。ここでアメリカ当局は水面下で極秘交渉を開始する。

捕虜の交換である。

当初アメリカとしては国家間の「取り引き」を隠しておきたかった。

国家の最高機密である最新鋭の偵察機を、ソ連上空で飛ばしていたこと。おまけに撃墜されてしまったこと。そんな都合の悪い出来事は秘密にしておきたかったのだ。

「捕虜の交換はあくまで民間レベルで交渉する」

そう決めたアメリカ当局CIAは、ちょうどソ連のスパイを弁護していたドノバンに、交渉役を依頼する。

ドノバンにはある考えがあった。

アメリカはあくまでも偵察機のパイロットと、ソ連スパイ、1対1の取り引きを考えていた。しかしドノバンは、学生とパイロット対ソ連スパイ、という2対1の交換を実現させようと考えたのだ。

「何を考えてる！ 学生など放っておけ！勝手に東ドイツに捕まっただけだ。パイロットの交換が最優先だ」

CIAはドノバンに圧力をかけてくる。

ドノバンが担当したソ連スパイは、物静かで穏やかな男だ。公園のベンチに座り、趣味で絵を描いている。善良な高齢者にしか見えない。

今、ソ連と東ドイツに拘束されているのは、二人の若者だ。彼らにはこれからの未来がある。

この老いぼれスパイ、ひとりを手放すことで、若い二人の将来を取り戻したい。

ドノバンはほとんど不可能と言える交渉に「民間人」として関わって行く。しかも、自分自身の命さえどうなるかわからないのだ。

指定された交渉場所は、壁の向こう側、東ドイツである。

もう紛れもなく「敵国」なのだ。

その敵国に特別なパスポートを持って入国したドノバン。

彼が乗る列車が夜、東西を隔てる「壁」の付近を通りかかる。

数人の人が壁をよじ登り、西側へ逃げようとするのが見えた。

監視塔からはサーチライトが照らされ、機関銃の乾いた音が響く。

壁の下で息絶える、名も知らぬ人たち。

ドノバン他、列車に乗り合わせた人々は、なすすべもなく、その光景を目に焼き付ける。

本作を鑑賞して、かつての「シンドラのリスト」のような重厚さを感じる。

偵察機の墜落シーンでのスリル、アクションの緊迫感溢れる映像もいい。

だが、本作はあくまでも敵対する国同士の「交渉」「かけひき」を描く映画でもある。スクリーンに映る絵としては地味になりやすい。ストーリーの流れが停滞する恐れもある。だが、スピルバーグ監督の演出は、実に淀みなく物語が進行してゆく。作家でいえばいわゆる「大家の筆致」をおもわせる。

そのなかで、ソ連側のスパイ、アベルを演じたマーク・ライランスの演技が秀逸だ。

自分はアメリカ社会の中にいかに目立たず紛れ込んできたのか、「存在感を消すこと」に細心の注意を払ってきた、一流のスパイを演じている。役者としては「引き算」の演技力とでも言おうか。感情を表に出さない、何を考えているかわからない、自らは主張せず、もちろんどこからどう見ても人畜無害。非社交的で、パーティーのお呼びもかからなそうな、孤独な人物。

あまりに地味すぎて、映画作品の中で余計に観客の注意を引いてしまう、気になってしまう、そういう人物像を見事に演じきった。



ただ、本作はヒーローを描いた作品という側面も持つ。

アメリカという国はヒーローが好きなお国柄のようである。宇宙飛行士などは絶大な人気があるらしい。

本作においてスピルバーグ監督はドノバンという、地味な一人の弁護士を描いた。ただ、彼の成し遂げた人道的な行為。それはアメリカ人にとって祭り上げたくなる「ヒーロー」なのである。地政学に限らず、国際政治を見ると、アメリカという国のあり方、国民性にハッとする時がある。

「自由と正義」というカッコいい旗印。それを大義名分として掲げた時、多民族、移民の集合体、州の集まりであるところの合衆国は一つに団結する。

あの9:11直後の雰囲気がい例である。

「自由と正義」のためには、国民の命さえ、多少の犠牲と引き換えにしても惜しくないという、ある種のこれは「全体主義国家」なのではないのか？ とさえ思わせる。

そういう国家としての「ふるまい」をするのである。その「自由と正義」の旗振り役としてカッコイイ「ヒーロー」が必要であり、常に需要があるのだろう。

スピルバーグ監督が描いたラストシーン、それはカッコいいヒーローでもなく、弁護士でもなく、平凡な家庭を持った一人の父親、そして夫の姿だった。その演出に僕はちょっとホッとした。スピルバーグ監督は、アメリカという巨大国家の動きだけでなく、一個人の生活、暮らしの目線に寄り添っている。少なくとも、それで作品としてのバランスを取ろうとしている姿勢が見える。

神の目線で地球全体の人間のうごめきを見た時、その地面に、はいつくばって生きている、点の

ような人間のちっぽけさ。

その小さな命には、紛れもなくそれぞれの人生がある。

弁護士、パイロット、学生、そしてスパイとしての人生。そんな人々たちが今日も地球と呼ばれる、丸い水惑星の上でアメーバーのようにうごめいている。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 スティーブン・スピルバーグ

主演 トム・ハンクス、マーク・ライランス

製作 2015年 アメリカ

上映時間 142分

[「ブリッジ・オブ・スパイ」予告編映像](#)

クリード チャンプを継ぐ男

クリード チャンプを継ぐ男

2016年1月26日鑑賞

もう「ロッキー映画」とは言わせないぜ！

「ロッキー・ザ・ファイナル」を観た時「シリーズ中の最高傑作ではないか！」と思ったのと同時に「これでロッキーシリーズも見納めだなあ〜」という一抹の寂しさを感じました。

しかし、その作品から8年、ロッキーシリーズは”まだ”終わった訳ではなかったのです。

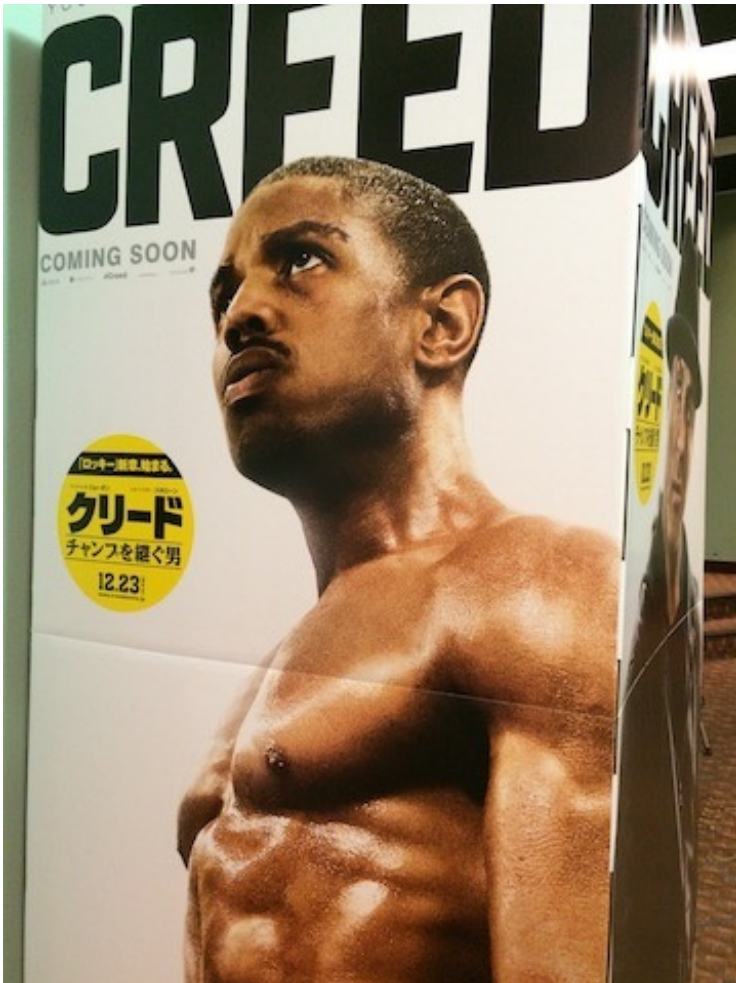
我らが下町のヒーロー、ロッキー・バルボアは、その魂を引き継ぐ後継者をスクリーンに登場させたのです。

本作「クリード」の主人公は、ボクシングのチャンプを目指す一人の若者、アドニス・ジョンソンです。

実は彼、ある人物のDNAを引き継いでいます。

彼の本当のお父さんは、ロッキーの永遠のライバル。

あのアポロ・クリード、その人でした。



アドニスは少年の日々、すさんだ生活を送っていました。町のゴロツキと喧嘩を繰り返し、警察の留置場にごやっかいになることもしばしば。

ある日”いつものように”留置所生活を送っていた彼に、一人の黒人おばさんが訪ねてきました。名

前はメアリー。上品で、教養もありそう。育ちの良さそうな黒人女性です。

「あんた、どうせ民生委員だろ」

アドニスちょっとハスに構えてメアリーを見ます。

実はメアリー、伝説のボクサー、アポロ・クリードの実の妻だったのです。

メアリーにしてみれば、目の前にいるのは紛れもない、亡き夫の忘れ形見。

他の女性が産んだ子供とはいえ、一人息子に違いないのです。

メアリーは微笑みます。

「あなたを息子として引き取りに来たの」

こうしてアドニスはメアリー・クリードの元で成人を迎えます。一般企業にも就職し、社会人として順風満帆。穏やかな人生を送るかに見えたのですが.....。

血は争えないといいますか、この辺りがアポロのDNAを引き継いでいるんでしょうね。実はアドニス、仕事の傍ら、メキシコのボクシングリーグでファイトしてるんですね。

結構いい成績を収めている。

そこで一丁、地元全米のプロリーグへチャレンジしたくなります。自分がナンバーワンになるには、どうしても頼みたいコーチがいます。

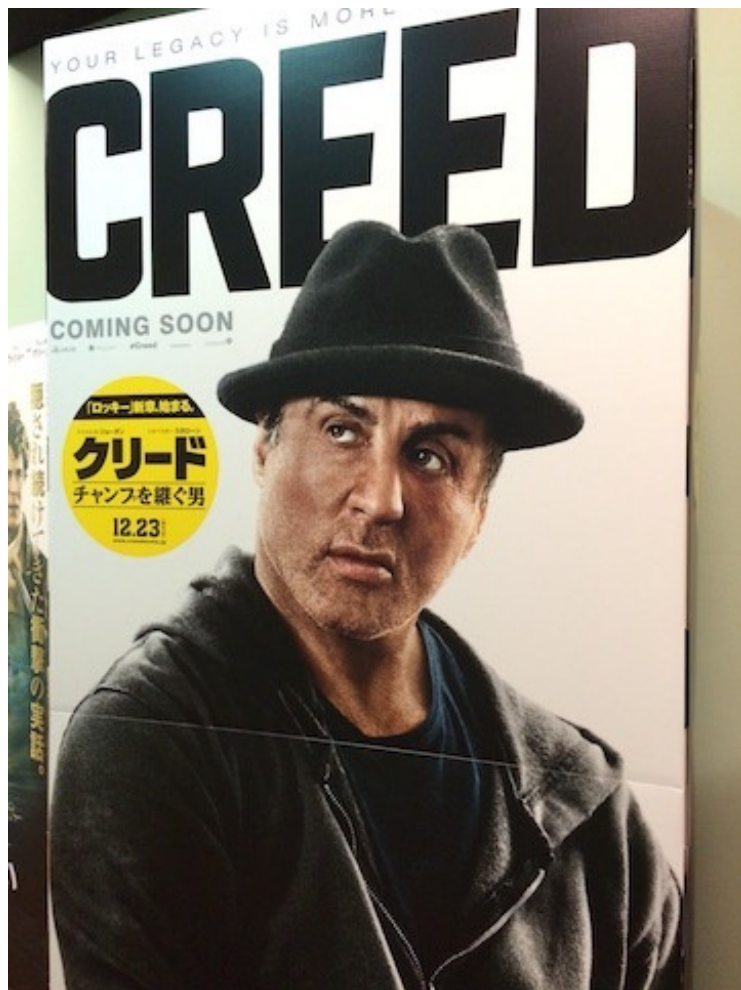
他でもない、自分の本当の父親、アポロ・クリードの永遠のライバル。そう、我らがロッキー・バルボア、その人です。

いてもたってもいられず、ロッキーの店に駆けつけるアドニス。

そんな彼を見て、

「アホいうな、おれはもう、ボクシングなんてやらん。見ての通り、老いぼれだ」

ロッキーはなかなか取り合ってくれません。



今ではイタリア料理の居酒屋を営むオヤジさん。

飲食店経営者の姿が、すっかり板についた感じがある、ロッキー。

おなじみの斜めにかぶった中折れ帽子。

だるそうに、くぐもった声でゆっくり語る、かつての栄光のボクサー。

その後ろ姿。背中から醸し出す、哀愁。

シルベスター・スタローン演じる、この初老の人物が、スクリーンで”若いモン”相手に、なだめるように諭し、語る姿を見て、もう涙が出そうになりましたよ。

本作では、ロッキーシリーズでお馴染みの、あのメロディーラインが、後半さりげなく挿入されるなど、ロッキーファンにとっては、まさに「涙モノ」の演出です。

もちろん、リング上での臨場感あふれるボクシングシーン。

そのカメラワークの見事なこと！！

踊るようで、しかも滑らか。手ブレなんか一切ありません。

まるでこれは、かつての伝説のチャンプ、「モハメド・アリ」の名セリフ

「蝶のように舞い、蜂のように刺す」

そういうカメラワークを使ってます。

わかってるなあ〜、この監督。

若干29歳のライアン・クーグラー。いい腕してますよ、この監督。

役者のアクションの段取りなど、何回も何回も、緻密に丁寧に確認したんだろうなあ〜、と思います。素晴らしいシーンの連続ですよ。



夢を追う若者の清々しさ、たくましさ。それを見守る老いたボクサー。

これから花咲く蕾と、枯れてゆく人生の対比の鮮やかさ。

そこには、なにか日本的な「もののあはれ、人のあはれ」さえ感じさせてくれます。

若い頃は上り調子、坂の上の輝きを目指して駆け上ってゆく。しかし、やがて人は知るので。

人間、誰しも老いる時が来る。

人生のくだり坂。気をつけないと、あっという間に転げ落ちる。

ちなみに登山での事故は、登りよりも圧倒的に下山時の事故が多いと聞きます。

この人生の下り坂、自分の生き様に、どのような決着、エンディングを見つけるのか？ そんな

ロッキーの姿に、僕のような中年オヤジは、おもわず自分を重ね合わせてしまうのです。

「俺はうまく、くだり坂を下りられるだろうか？」と。

人生の枯れゆく姿を、本作において美しく映像として切り取ってみせた、若き映画作家。

ロッキーはもちろん登場するけれど、本作は「もう、ロッキー映画ではない」のです。

紛れもなくロッキー映画のDNA、バトンを受け取った「次の若き世代」が作り上げた、新たなボクシング映画の秀作の誕生。

スクリーンで、その瞬間に立ち会えたことを嬉しく思います。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ライアン・クーグラー

主演 マイケル・B・ジョーダン、シルベスター・スタローン

製作 2015年 アメリカ

上映時間 133分

[「クリード チャンプを継ぐ男」予告編映像](#)

フランス組曲

フランス組曲

2015年1月28日鑑賞

高潔な魂が封印を解かれる

クラシック音楽をモチーフに使った映画は、大好きです。本作も予告編を見た時から「どうしても観てみたい」と思わせてくれた作品。劇場に観に行ったら正解でした。

エンドロールで涙が溢れました。

60年間、トランクの中にひっそりと閉じ込められていた未完の小説。作者が書き溜めた、戦時中の悲恋物語。フランス人女性と、ドイツ人青年将校との許されぬ恋。

そして、この物語を書き綴った、作者イレヌ・ネミロフスキー。

彼女は作品の完成、出版を見届けることなく、アウシュヴィッツのガス室へ送られていったのです。



物語の舞台は1940年、フランスの片田舎。ドイツがフランスに攻め込んでいた頃です。

主人公、リュシルは領主の息子と結婚。しかし彼女の夫は今、戦地で戦っています。

屋敷は義理の母である、アンジェリエ夫人と下女、そしてリュシルの、女性3人だけで守っています。

アンジェリエ夫人は領主ですので、広大な農場を所有しています。土地を貸し付け、毎月小作人

から賃料を取り立てて生計を営んでおります。

アンジェリエ夫人は、若い嫁のリュシルを車に乗せて、小作人の家々を回ります。

農家の生活は貧しく、厳しく、見るからにみすぼらしい。しかし、容赦なく、お金を取り立てて廻る夫人。

「大事な仕事なのよ。次の代はあなたが取り立てるんですからね」

そんな農家が可哀想になり、リュシルはちょっと憂鬱です。

パリから遠く離れたこの田舎町には、まだ戦争の実感がありません。

しかし、ラジオでは「パリが陥落した！！ 街から地方へ逃げ出す人で道が溢れかえっている！」と伝えています。

そんなある日のこと。

ズサッ、ズサッ、ズサッ。

リュシルが住む片田舎の町に、なにやら規則正しい、不気味な音が響きます。それは占領にやってきたドイツ軍兵士たちの軍靴の足音でした。

ドイツ軍はめぼしい屋敷を次々に接收してゆきます。立派な邸宅は、将校の宿舎として利用するのです。

アンジェリエ夫人とリュシルが住む屋敷にも、一人のドイツ人青年将校がやってくる。

「私の宿舎として、書斎と寝室をご提供頂きたい」

相手がユダヤ人ではなく、フランス人だからでしょうか、それともこの青年将校の性格なのでしょう、ずいぶん礼儀正しい。

ちなみに、襟章を見ると分かるんですが、彼らはドイツ軍の中の「国防軍」と言われる軍隊。

ヒトラー直属の狂信的なナチスの軍隊「SS」（親衛隊）ではありませんでした。

青年将校ブルーノ・フォン・ファルク中尉が案内された部屋には、ピアノが置いてある。

一つ屋根の下、敵のドイツ人将校との暮らしが始まります。

アンジェリエ夫人も、リュシルもなんだか嫌な気分です。

そんなとき、青年将校の部屋から、ピアノの音色が流れてくる。

美しさと儚さと、心の気高さを感じるメロディー。

リュシルはそっと将校の部屋を覗いてみます。それに気がつくファルク中尉。

「実は、私、軍隊に入る前、作曲をしていました」

リュシルはファルク中尉の机に、大量の書類を見つけます。どうやらそれは「密告」の手紙のようです。

いまや、村を占領し、権力の頂点にあるのはドイツ軍。そこへ密告すれば、自分の家族に対して、ドイツ軍は優遇してくれるかもしれない、という実に切ない思惑がある訳です。

敵国の占領下で生きる、ということ。さらには、まだ戦争の行く先も見えず、これから戦火が拡大してゆく時代。市井の人々の、生き残ることへの生々しい執着。

その戦争の時代に奏でられる、美しいピアノの旋律。

ファルク中尉とリュシル。

禁断の恋の扉がここから開いて行くのです。



本作は第二次大戦中という時期ではありますが、ちょっと、時代劇の雰囲気も持ち合わせているんですね。

ここで、映画の大切なお楽しみがあります。ロケーションと舞台装置ですね。

たとえばアンジェリエ夫人のお屋敷。年代を重ねた、建築物の佇まい、室内調度品。

フランスの地方貴族っていうのは、その昔、こんな風に暮らしていたのかあ〜、と思わせてくれます。また、第一次大戦を経験した貴族たちの屋敷には、万一に備えて、食糧を備蓄する隠し部屋があったことなど、興味深いです。

映画に登場する小物に目を移すと、夫人が乗っているクルマも、1940年当時のものですね。フロントのエンブレムを見ると、おそらく[シトロエン](#)。7CVという車種（なんと先進的な前輪駆動！！）でしょうか。また、ドイツ軍が使っているバイクにはBMWの紋章が見えます。こんな、ちょっとしたところを見つけるのも、映画の楽しみであります。

さて、第二次大戦当初でも、地方の田舎町などでは、戦争の雰囲気はどこか遠くの街でやっていること、のような雰囲気が当初はあったんですね。ところがそのうち、パリから逃げてくる、大量の「難民」に出くわすリュシルとアンジェリエ夫人。難民たちの列を狙う戦闘機の機銃掃射。あっという間にドイツ軍がやってきて、突然、田舎町は占領。

ようやく「ああ、これが戦争ということなのか」と実感することがわかります。

先日テレビ放送された、井上ひさしさん原作の戯曲「きらめく星座」を鑑賞しました。

太平洋戦争に突入する直前までの、庶民の生活が実に丹念に描かれています。

当時、日中戦争の真っ最中。でも、庶民の間には、さほどの悲壮感は感じられないんですね。

のちに東京が火の海になるなど、想像もしていません。

ただ、物資は少なくなっています。本物のコーヒーがなかなか手に入らない。銭湯に行くのに、石鹼に紐を結びつけてゆく、という場面があります。というのも、当時すでに石鹼が貴重品で、銭湯で石鹼を泥棒する輩がいたからです。

そんな当時の日本では、どんな音楽が庶民に好まれていたのでしょうか？

例えばその中の一曲

「私の青空」

これ、オフビートの紛れもなくジャズのリズムです。のちに「敵性音楽」と呼ばれた楽曲です。

。

なお、本作「フランス組曲」でも、ドイツ人将校がレコードをかけるシーンがあるんですが、どうやらこの曲「エディット・ピアフ」の曲ではないかしらん？ と思えるのです。

彼らドイツ人にとっては敵国の音楽。でも、楽曲は敵味方、関係なく「いいものは良い」のです。音楽がもたらす楽しさ、こころの安らぎは、国境を越えてしまうのですね。

なかでも、ピアノ演奏などの「器楽曲」には言葉がありません。

ゆえに、ドイツ人であろうが、フランス人であろうが、それこそ日本人であろうが、音楽を愛する心があれば楽しめます。

自分の胸を開いて、音を受け入れるココロを持っていれば、高潔な魂を持った音楽は、必ず、あなたのココロの深あ〜いところまで、感動を届けてくれます。

音楽にはそういうチカラが、紛れもなくあるのです。

60年以上前、無念の思いでこの世を去った、作家の魂は死んではいませんでした。

ノートにびっしりと書き残された貴重な遺稿は、時を超え、ついに出版され、映画という形で見事な大輪の花を咲かせました。

アウシュヴィッツのガス室で、死を迎えざるをえなかった、作家の魂が、本作で流れるピアノのメロディーを借りて、21世紀の今、私たちに語りかける「想い」を感じてみてください。

本当にいい作品に出会えました。

作者イレーヌ・ネミロフスキーの魂に、感謝を捧げたいと思います。

（原作「フランス組曲」のご案内）

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

- 物語 ☆☆☆☆☆
- 配役 ☆☆☆☆
- 演出 ☆☆☆☆☆
- 美術 ☆☆☆☆
- 音楽 ☆☆☆☆☆
- 総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ソウル・ディブ
主演 ミシェル・ウィリアムズ、マティアス・スーナールツ
製作 2014年 イギリス、フランス、ベルギー合作
上映時間 107分
[「フランス組曲」予告編映像](#)

***なお、今月号は洋画部門のみの鑑賞となりました。ご了承くださいませ。

2016・2月号 映画に宛てたラブレター

<http://p.booklog.jp/book/103972>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/103972>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/103972>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ